とくしまマルシェ
～こだわりのつまった徳島の「おいしい」を発信～

研究員　佐々木志保

1．とくしまマルシェとは

（1）開催経緯

徳島県は、温暖な気候、豊かな水資源、肥沃な土壌に恵まれ、野菜や果実、米、畜産物など多種多様な農産物を生産している。また、京阪神などの大消費地への交通のアクセスが良く、重要な供給基地として農業ビジネスのさらなる飛躍へのポテンシャルが高い地域である。県都徳島市は大小134本の河川が流れる全国でも有数の「水の都」であり、川に囲まれた徳島市の中心部は上空から見れば形がひょうたんに似ていることから「ひょうたん島」と呼ばれ、市民に親しまれている。農業の高いポテンシャルと、こうした川に囲まれた美しい景観を最大限に活かし、地域経済の活性化につなげようと当研究所が提案し、実現したのが「とくしまマルシェ」である。

とくしまマルシェ（以下、マルシェ）は、本県の「農業ビジネスの活性化」だけでなく、「県外からの集客による観光活性化」、また開催場所が徳島市の中心部の新町川沿いであることから「中心市街地の活性化」の一石三鳥を目指している。毎月最終日曜日に行われるマルシェは、台風などの気象条件や新型コロナウイルスの感染拡大状況によりやむなく中止となったケースを除き、2010年12月の第一回開催から毎月開催されており、2022年12月には12周年を迎えている。運営主体は株式会社ネオビエントが担っており、毎月のフェアの内容の充実や新たな出店者の発掘、各種イベントとの連携など、積極的かつ真摯に事務局運営をしている。マルシェは自治体からの助成金に頼ることなく、民間企業主体で運営されていることも注目されており、同様のイベント実施を計画している団体からの視察依頼が後を絶えない。来場者は、当初からの常連客に加え、小さな子ども連れのファミリーや学生などの客層も徐々に増加し、幅広い世代に認知され、楽しまれている。また、先に述べた視察や県外からの観光客なども数多く来場している。

新町川沿いに約80本の白いパラソルが軒を連ねる徳島県最大級の産直市は、今では徳島の風物詩として定着している。さらに県内外を問わず認知度は向上しており、地域活性化の好事例として取り上げられている。

とくしまマルシェ　ロゴマーク

（2）特徴とこだわり

マルシェの最大の特徴は、参加希望者ならば誰でも出店できるのではなく、事務局スタッフがこだわりを持っている生産者のもとへ足を運び商品を吟味、選定基準に沿って審査し、出店を依頼するという「逆指名制」を採用している点である（図表1）。徳島産でストーリーや想いのつまった、おいしい商品を届けたいという高い志のもと、県内各地で生産者の発掘を行っている。

図表１　出店者の選定基準

1	品質への姿勢	独自の生産技術や取り組みのもと、安心安全とおいしさを追求した産品であること
2	素材のちから	色・形・大きさを絶対基準とせず、素材が持つ特質・魅力が引き出されていること
3	素性の確かさ	誰が、どこで、どのようにして作られた産品であるかを明快に発信できること
4	ビジネスへの意識	つくることだけでなく、売ることにおいても、ひたむきな努力と向上心があること
5	目標の共有	「とくしまマルシェ」の一員として、地域および徳島県生産物の発展に取り組み、「食大国徳島」ブランドの確立を共に目指せること

徳島県産のこだわりの農産物や加工品などを厳選して集めることで、マルシェに統一感が生まれ、コンセプトがぶれることもない。それは、来場者の安心感となり、出店者の誇りにもつながる。事務局、出店者、来場者が育み、発展させていった唯一無二のマルシェであると言えよう。

写真１　当日の様子

写真２　オリジナルエコバッグ

写真３　SDGs ワークショップの様子

2. SDGs啓蒙活動：SDGsワークショップの開催

マルシェでは、SDGs の啓蒙活動にも積極的に取り組んでいる。プラスチック製のレジ袋が有料化（2020 年 7 月 1 日～）される以前の 2020 年 1 月より、それまで事務局で販売していたレジ袋を廃止。さらに SDGs の目標の一つである「12　つくる責任　つかう責任」のロゴがデザインされたオリジナルエコバッグの作成・販売を通して、マルシェとしていち早く SDGs に取り組み、マイバッグ持参を後押しをするなど環境へ配慮したイベントを運営している。

また来場者を対象に、工作を通して SDGs について学び、考えるきっかけとなるワークショップを毎月実施しており、主に子ども連れの来場者に人気を博している。初回は 2021 年 7 月「保冷剤リメイク消臭剤」で、その後は毎月行っている（中止となった月を除く）。開催回によってワークショップの内容は異なり、手ぬぐいをリメイクした箸袋や廃材から出る木粉を使用したお絵描きうちわ、クリアファイルをリメイクした風車などさまざまである。

ワークショップの企画の際に大切にしていることは、①身近にあるものや使わなくなったもの（従来であれば捨ててしまっていた端材など）を活用すること、②作成した作品や体験を通して、リサイクルやエネルギーなどについて学ぶ場とすること、③「ものを大切に使う心」を育むきっかけづくりの場とすることである。楽しみながら SDGs について学ぶ場が提供されており、ワークショップをきっかけに、親子で SDGs について考える機会や話題の提供につながり、マルシェの来場動機の一つとなっている。

SDGs
（Sustainable Development Goals）
＝「持続可能な開発目標」とは

2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標。17 のゴール・169 のターゲットから構成され，地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓っている。

3. ラシクルモールとの連携

（1）とくしまマルシェセットの販売

事務局が 3 か月毎にテーマを決め、マルシェ出店者の商品を厳選し、趣向を凝らした徳島のおいしいもの詰め合わせセットを、ラシクルモールで販売している。例えば、2022 年 7 ～ 9 月（好評につき、販売期間延長）は「おにぎりとご飯のおともセット」、10 ～ 12 月は「まったり家呑み おつまみセット」と内容がガラリと変わる。毎月のイベントだけでは気づけていなかった徳島の逸品に出会うチャンスである。

写真 4　とくしまマルシェセット「おにぎりとご飯のおともセット」

また、通年販売として「SDGs テーブルセット」や「城西高校応援！本藍染めによるマスク＆ハンカチセット」、先述の「オリジナルエコバッグ」が用意されている。マルシェ出店者の商品の一部も購入可能であるため、一度ラシクルモールを覗いてみてはいかがだろうか。徳島の魅力再発見の機会にしてほしい。

（2）おつかいとくしまマルシェ

ラシクルモールが企画し、とくしまマルシェ

写真 5、6　おつかいとくしまマルシェの様子

の全面協力のもと、2021 年 11 月開催時に一人でのおつかいにチャレンジするワークショップ「おつかいとくしまマルシェ」が催された。6 歳の男の子、女の子の 2 組が挑戦し、それぞれの家族はスタート地点の阿波銀行本店からモニター越しに見守る。当日は一般の来場者もたくさんいるため、緊張しながらも頑張る姿があった。おつかい後の参加者からは、ホッとしたような誇らしいような表情が見られた。

このように、地域の子どもの成長につながる活動にも積極的に協力している。地域貢献という視点からも、マルシェが与える好影響は計り知れない。

ラシクルモールとは

Lacycle（ラシクル）は、私“らしく”と、循環を意味する“サイクル”をかけ合わせた造語。
「Lacycle mall（ラシクル モール）」には、

・安心・安全で私たちの豊かな暮らしに寄り添うもの
・地域の風土や昔ながらの伝統を大切にしたもの
・生活環境や社会に良いもの
・子どもたちの笑顔につながるもの

が揃えられている。阿波銀コネクト株式会社が運営しており、2021 年 4 月 20 日にオープンした。ＥＣモールのプラットフォームを地域事業者に提供し、地域資源の活用や新たな価値創造、販路拡大の支援など、地域社会や利用者の継続的な発展に貢献することを目指している。

Lacycle mall
私らしく暮らしは巡る。らしくる。

4. 出張とくしまマルシェ

毎月最終日曜日のほかに、ボードウォークを離れ、「〝出張〟とくしまマルシェ」が開催される

写真 7　鳴門市への出張マルシェの様子

ことがある。マルシェの知名度が高まるにつれ、出張依頼も着実に増加している。コロナ禍ではイベント自体が中止・自粛となり、依頼も減少したものの、足元では行動制限がなくなったことでイベント等が増加、それに伴い、出張依頼も増えつつある。

主な依頼内容は、

- 県内各地域で開催されるイベント（開催される地域の外から事業者を募る役割）
- 県外開催のイベント（フードフェス「まんパク」など）
- 県外百貨店での物産展
- 徳島県や徳島市など、行政が主催するイベント（開催場所は県内外）

などであり、とくしまマルシェブースを設置し、出店希望を募るなど協力している。

マルシェが出店することにより「とくしまマルシェとコラボ」という話題性ができる。そのほかにも、マルシェで販売されている商品のレベルが高いことやマルシェのネームバリューによる集客を見込んだメリットなどを考えてのものであろう。県内でのマルシェといえば「とくしまマルシェ」といえるほど、徳島にとってかけがえのないイベントへと成長している。

5. さらなる発展に向けて

マルシェは、地域に寄り添い、地域とともに

写真８　ミニミニ出張マルシェの様子

発展してきた。コロナ禍においては、事務局であるネオビエント駐車場で「ミニミニ出張とくしまマルシェ」を開催したり、オンラインショップを開設したりするなど、生産者に寄り添い、できる支援を模索しながら企画・運営する姿がある。

出店者はもちろん、事務局や来場者で発展させてきたマルシェは、今後も出店者や来場者などに愛され、それぞれの協力のもと発展していくのだろう。そしてこれからも徳島の魅力を県内外に発信していく存在であり続けてほしい。

最後に、これからのマルシェをより輝かせるためにも、まだマルシェに来たことがない県民の方には、ぜひご来場いただきマルシェの魅力を肌で感じていただければと思う。また、こだわりを持って生産されている農家の方々や徳島産をふんだんに使用し、徳島ならではの加工品を作っている方々の積極的な出店をお願いしたい。15 周年に向けて、さまざまな方々の協力のもと、徳島の貴重な資源としてさらに発展していくことを期待している。